

残暑も落ち着きましたが、今度はコロナとインフルエンザの両方の流行があると言われています。皆様引き続き健康にはご注意ください。今はそのような時ですが、コクサイ心理は学生さんたちの元気な活動の様子をお伝えしたいと思います。(編集：橋本)。

就職活動 ご報告

4 年生では就職活動が始まります。正確には、3 年生の後半から始めている学生もいます。それぞれの進路を決定するという闘いが終わるのは「内定」をいただいた時ですね。心理学科臨床心理専攻では、8 月末時点で就職を希望する人の 70%以上が決まりました。これは、コロナで就職活動が大変だったこの 2,3 年と比べると最も良い状況です。残りの学生もラストスパートに向けて頑張っています。



大学祭の思い出 2 年生編



第 1 号では大学祭に取り組む 1 年生の様子をご紹介しましたが、今回は 2 年生の活動をお伝えします。2 年生では各ゼミで模擬店を出店し、販売活動をしました。写真は焼き鳥を販売している様子です。お客様もたくさん並んでいますね。コロナが落ち着いて大勢の来場者があった大学祭では、どのお店も売り上げが好調だったようです。

司法領域見学に行ってきました

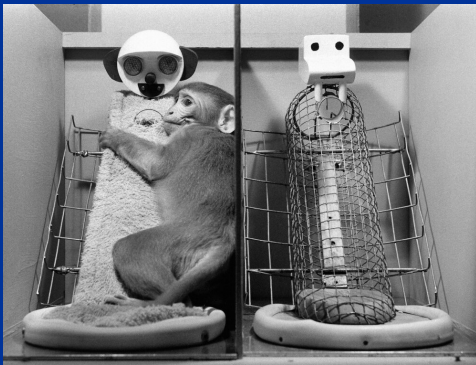
7 月・8 月に大学院と学部のフィールドワークとして北海少年院及び札幌少年鑑別所を見学しました。授業での学習だけでは十分には理解が困難な実務の実際の説明を受けることができました。学生さんたちには司法領域の公務員として働く具体的なイメージがわいたかと思います。写真は左が北海少年院で右が札幌少年鑑別所です。



皆さん、最近、札幌円山動物園で生まれた赤ちゃんゾウの話題がニュースでひんぱんに聞かれるようになりましたね。ところで、赤ちゃんにとって、産んでくれたお母さんの役割って何か？を実験で研究した人がいます。それは、ハーローという科学者です。

【お母さんの役割は食べ物をくれることですか？それとも愛情を与えてくれることですか？】

その疑問を解明するために、ハーローHarlow、H. F. は二種類の母を用意して、赤ちゃんアカゲザルがどちらの母のところに長く滞在するか、その時間を計測しました。母親の一つは針金でできており吸うとミルクがでてくる仕掛けがしてありました。二つ目の母親には、毛布が巻いてありますが何も食べることはできません。



特集ギャラリー：触れ合いのパワー 写真と図解 18 点 (2022 年 6 月号) | ナショナルジオグラフィック日本版サイト (nikkeibp.co.jp)より引用

実験結果としては、圧倒的に毛布母の方が滞在時間が長かったということでした。赤ちゃんザルはお腹がすくときだけ、針金母のところに行ってミルクを吸い、すぐに毛布母のところに戻っていたということ。結論としては、赤ちゃんザルにとって母親はぬくもりを与えてくれる存在であり、そのような母親が愛情を与えてくれ、子どもにとっての安全基地として機能することが明らかになった、ということです。

また、心理学にはマターナル・デプリベーションという考え方があります。それは「母性的養育関係の喪失」と訳されますが、生後1年ほどの間に母親との密接な関係ができていない状態だと、子どもが成長後にも人間に信頼感を持つことができない、または精神状態が不安定になるということです。この問題は虐待や育児放棄などともつながってきており、子どもの「こころの健康」を悪化させる要因でもあります。

もし、不幸にして健全な母子関係（現在では、母とは限らず子どもに愛情を注いでくれる人と考えられています）を経験できなかった子どもがいたら、どうすればいいのでしょうか？

心理の専門家である「公認心理師」や「臨床心理士」は、そのような子どもたちが「健康なこころ」を取り戻すために心理療法をすることがあります。例えば、プレイセラピーという療法では子どもと一緒に遊びます。それは、遊びを通じて、その子どもが今までの経験が少ない「楽しむ」気持ちをたくさん持つためです。また、言葉では表すことのできない子どもの気持ちが表現されることがあります。このように「公認心理師」や「臨床心理士」は、子どもが「健康なこころ」を取り戻すために様々な働きかけをしています。

参考文献：Harlow, H.F. 1979. The human model: Primate perspectives. V.H. Winston & Sons, Washington D.C.